

十一面観音像

たなか踏基

高校時代の友人に、一陽会常任委員の彫刻家がいた。東京芸術大学の彫刻科を卒業した男である。今年の四月末の確か連休前に、突然その男の訃報に接し私は少なからず動揺した。彼と美術界同業の旧友が男の急逝を信州から知らせてきたからだ。坂北村の実家をアトリ工と称し、絵を描いていた貧乏画家のその旧友も、流石にシヨックを隠しきれず、何時に無く早口で私にその男の死を電話口で告げていた。

訃報を知らせてきた旧友も私も、大学に入ってから、谷中の幽霊でも出そうな彼の下宿で共に世話になったことがある。上京の折、私はそのあばら家に泊まり、互いに独身時代の夢を語り合った間柄であったからだ。それなのにその男は、大学院卒業後四十年余、ひたすら石を刻み続け、私に黙って逝ってしまったのか？

確認のため、男の自宅に電話したが細君は留守であった。直ぐに、彼の仲間や弟子達の溜り場を思い出した私は、厚木市にある彫刻工房に電話をした。電話口に一人息子が出た。息子も東京芸大卒業の親子二代にわたる彫刻家である。死亡は三月二十五日で癌であったことを知った私は、葬儀を知らされなかった無念さを息子に告げた。

その夜、細君から電話があった。高校の同級生同志の結婚で、細君のことも良く知っ

ていた私は「何故知らせてくれなかったのですか！」と彼女の気持ちや口調になつていざ。細君はしきりに詫びながら小さな声で「何時かお線香を上げに来て下さい。」言葉少なに電話を切った。

私は、連休に入ると直ぐに、男の霊前に焼香に行こうと思ひ立ち、都合を問う電話を自宅にしたのだが、何時掛けても細君は留守であった。夫の喪もあけないのに、旅行にでも出掛けたのか？とその不謹慎をいぶかり、些か呆れながら、仕方なく手紙を添えた現金書留の封筒で、男の七七忌前に香典を届けた。程なく、香典返しの息子の挨拶状と、お茶の包に添えた細君の手紙が、宅急便で届いたのは、連休あけのまるで初夏を思わせる暑い日のことであった。

お心使いありがとうございます。

五月二日ふるさとの寺で彼の納めた十一面観音像の守る場所で七七日の法要を済ませました。安曇野は春の最中でした。山荘の庭に少しだけ彼の灰をまきました。彼が愛して止まなかった安曇野と共に眠る彼になりました。十二日の四十九日にあたる日に、こちらの墓所となる寺にお骨をあずけます。こうやって夫は、だんだんと心の中の存在に変化していくのです。よき友としてほんとうにありがとうございました。どうぞこれからもご親交くださいますように。折がありましたら線香をあげてやって下さい。私も少しづつ元気になつて自認していた「自立する女」に戻りたいと思つていますが・・・季節の変化の早

さに驚かされます。ご自愛下さい。

文面を読んだ私は、彼が刻んだ観音像をぜひこの眼で観たい衝動に駆られ、寺の場所を息子から聞いて三郷村にとんだ。卯月の安曇野はまさに緑滴り、常念岳も霞んでみえた。

ネット検索で彼の名前を打ち込むと、彫刻界の「石の詩人」としての足跡が偲ばれる。作品に、素材の石を感じさせない素朴さと温かみと優しさを覚える。およそ酷暑育ちの信州人らしからぬ詩を石材に丁寧な刻み込む、彼の叙情的マチュールが一体何処から生じたのか？高校時代の応援団長の生一本な男臭さや、芸大時代の冬山を登る強靱な肉体に秘められた彼の原風景を、初めて安曇野の中に垣間見ることができたのである。

細君は、男のロマンに付き合つて、彫刻では食えない彼を一生支え続けた。家内と一緒に、新装なつた練馬春日町駅の大根のレリーフや風船を持つ少女像・椅子や帽子を描いた作品を觀に、銀座・横浜のアートギャラリーを訪れたこと、時には細君と一緒の、パーティに付合つたこと等を懐かしく想いだす。美術界に疎い素人の私でも、その男の死は日本の彫刻界にとって大きな損失だったのである。これは私一人だけの身びいきであろうか？

来春もう一度、今度は家内と二人で、三郷村の枝垂れ桜が美しい時期に寺を訪れ、遺作の十一面観音像を拝観し、彫刻家の魂の故郷安曇野を時間を掛けて散策してみようと思つている。その寺の名は「瑠璃光寺」である。

了